石城川の地名

佐藤末喜

(はじめに)

挾間町高崎のウシロ地区に「新貝」という小さな地名がある。土地の人はシンゲと呼んでいる。高崎山の麓で海や貝にはまったく所縁のない土地柄である。もともと平田と呼ばれていた地域から、独立して出来たこの地名は比較的に新しく、慶應二年(一八六六)に石堂溜池が築造されて水田化されたときに、「新開」が転訛して「新貝」となったもので、もともと新田・新屋敷・今田・今治などと同じ意味で、江戸時代以降に開発された水田を指す地名である。口頭でシンゲといわれてもまるで意味不明で、年月を経て行くとますますその意味がわからなくなるであろう。

地名はそこに住む人々の暮らしに密着しており、文字を持たない時代からの文化遺産であり、隠れた歴史とも呼ばれる由縁でもある。

竹内理三博士が角川日本地名大辞典に、「民族遺産としての地名を書きとめること、今日ほど急務の時はない」と指摘されているが、この警句に啓発されて石城川に伝わる地名を調べてみた。

〔地名の分類〕

我が国は歴史も古く、地形が複雑なうえ人口密度も高いゆえ、非常にたくさんの地名がある。おそらく日本の地名総数はあるいは億を数えるのかもしれない。ほとんど無数にあるといってもよい数であろう。

地名を研究した先学によれば、広範、多岐にわたる日本の地名もある基準によって分類が可能であるという。吉田東伍氏・楠原祐介氏・都丸十九一氏などの先学の代表として柳田国男氏の説を挙げよう。

柳田は

① 利用地名　通過、採集、捕獲、耕作など土地利用の目印、対象となったもの。最初の地名。

② 占有地名　個人、家族などで山林その他を所有した時の地名。

③ 分割地名　上記二つを基準にして、それを区画(上、中、下とか東西南北など)して呼ぶ地名。

の三部に分けて分類している。地名の研究をふくめた民俗学の分野における柳田国男氏の存在は巨大で今日なおその影響力は大きい。

また梅木秀徳氏も「大分の地名」のなかで、①自然地名②歴史地名③生活地名に分類しているが、この説は簡潔で分りやすい。梅木説によれば

① 自然地名〜地形にもとづく地名。谷・迫・河内・津留・鶴・窪・大久保・鉢久保・鳥越など。

② 歴史地名〜政治制度に関係するもの。古国府・国分・城の腰・用作・堀の内など。

③ 生活地名〜歴史地名の中で、人々の生活に縁の深いもの。田代・新貝・井手・焼野・辻・弐里木など、農業に関するものが

多い。

（大分県各町村字小名取調書）

さて、地名が国家行政上の地名へと質的転換を促された具体的な例は政府による「字小名の調査」であろう。

明治政府が力をいれて実行してきた地租改正の大事業は明治十四年に完成する。その結果地主には一筆ごとに地券が交付され、それには必ず小字名が記入された。同年政府は、全国各府県に命じて小字名調査を実施した。その時の太政官達八十三号に曰く「各地ニ唱フル字ハ、其地固有ノ名称ニシテ、往古ヨリ伝来ノモノ甚多ク、土地争訟ノ審判、歴史ノ考証、地誌ノ編纂ニハ最モ要用ナルモノニ候条、漫ニ改称、変更、不致様可心得、此旨相達候事」（明治十四年通達）。その報告が「地理雑件」として内務省地理局に集められ、その膨大な資料は東京帝国大学に寄託されていたが、不幸にも関東大震災の折に大半を焼失してしまう。が幸いにも大分縣版は原稿が残されていた。一覧してわかる通り各村の調査、報告に対する対応はマチマチである。村役場などの行政体制が整ったのは明治二十二年の石城川村の成立後であり、この時期は第三大区二十二小区と呼ばれていたから、小区毎に用務所が置かれのちにこれが戸長役場となった。おそらく戸長が各村の報告内容を整理したわけでもなかったから、各村惣代を中心とした長老グループがマチマチに対応したのであろう。七蔵司村や高崎村が詳細に渡り、内成村、田代村、来鉢村は簡素であり、宮苑村はその中間といった具合になっている。大村である内成村や来鉢村にはこの他にも多くの地名があったが、なんらかの事由で大半の小名を整理して報告したのであろう。

本稿では地名記録を①豊府略記、②神社合併願、③大分県町村字小名取調書、④地籍図（正確には土地登記簿付属地図と呼ぶ。明治期には字図・字切図・字限図と呼ばれた。ここでは明治二十二年に制定されたものを使用する。）に分けて検証することとした。

まず、上記明治政府による地名調査より前、江戸時代に書かれた①の「豊府略記」によって地名をみてみよう。

「豊府略記は豊後府内藩管内の数少ない貴重な旧記であるが、此の書は原本も著者も判明せず公刊されたものもなく、只数種の伝写本によって伝承されているため誤、脱、異漏が甚だ多い。」（豊府略記の校定について）とされているが、江戸時代における石城川地域を含む豊後地方の地名を探る唯一の史料として尊重したい。

ただ豊府略記に出ている地名は、人家のあるところ、人の住んでいるところに限られていたように思われる。

②の神社合併願は明治九年一月に当時の第三大区二十二小区の六村が連名で大分県令に提出した書類である

④の地籍図は明治二十二年の町村合併令に先行して明治十九年頃よりはじめられた、所謂「地籍調査」の結果ほぼ現在の小字が確定したものであり、現在も行政上使用されているものである。なお、第三大区二十二小区は明治二十二年に合併して石城川村となったがその時、旧村名は大字として残された。

上記①、③、④を表にまとめれば以下のようになる。

	①豊府略記	③字小名調査	④地籍図
宮苑	16	43	28
高崎	9	79	20
七蔵司	25	98	35
来鉢	26	25	25
田代	17	12	19
内成	42	26	68
計	135	283	195

（石城川村に特有の地名語源）

次項以降に旧村別に地名を掲げていくが、その前段として石城川村に比較的に多い地名の語源について、解説しておこう。

クエ～〈崩〉 崩壊地。山腹の崩れ谷、あるいは山崩れによって平らになったと思われるような山。アリクイ（高崎）はアリクエの転訛であろう。

クボ～〈窪・久保〉 窪地のこと。猪ノ久保・鉢ノ久保・五反田ノ久保・穴井ノ久保・立石久保など。

コウチ・ゴウチ～〈河内、川内〉 河谷のこと。迫（サコ）よりも広く、長く連なっている谷に多い。内河内・河内など。

コエ・コシ～〈越〉 尾根の鞍部などを越えて行くところ、峠。鳥越などは鳥が山を越えるとき低い鞍部を通るところから来ている。内成・七蔵司・高崎に鳥越（トリコエ、トリコシ）あり。

サコ・ザコ～〈迫〉 谷間。とくに谷より規模が小さく、源頭部で尾根に囲まれた狭い場所をさす例が多い。大迫・後迫・中ノ迫・目ノ子迫・金迫・鷺の迫・迫・八郎迫・四良迫・風呂迫などが石城川村にある。

ソノ・ゾノ～〈園〉 畑などと同じものかもしれないが、律令の園地の流れをくみ、荘園の徴税単位となっていた在家を意味するものが多いといわれている。柞原八幡宮の菜園地との説もある。御園・中園・北園などのほか宮苑や古殿（園が殿に転訛）も同じ語源である。

ツジ～

辻。①村の中などで道が交差している所。②山や丘の頂。

宮ノ辻・辻・峠ノ辻・諏訪ノ辻など。

ツル・ヅル～〈鶴・津留・釣〉 川のほとりの平地。河口の三角州、中流の川岸、山間の小盆地などに見られる。水流を伴っていることが条件で、ツルの意は平地よりはむしろ水流の方にある。由布川の左岸、詰・田代・来鉢地区に多い反面石城川流域にはこの地名はない。この語源の典型的な例は宮崎県日之影線の川水流（かわづる）」である。五ヶ瀬川の蛇行地に出来た平地でまさに水流（ツル）である。石城川村の近在では小野鶴

（賀来）や底鶴（谷村）も同じでここでは津留が鶴に転訛している。

ヒラ・ビラ〜〈平〉平地。平らなところ。山間に開けた場所などの際は、水平地よりも緩傾斜地を指していることが多い。方言的にヘラと呼ぶこともある。高平・ムカイヒラ・北平・南平・立平・下平・荒平・小平など多数ある。

つぎに重複している地名についてみてみよう。とくに七蔵司・高崎地区に多いのは高崎山南麓の地形の相似によるものであろう。

四良迫（七蔵司・高崎）**高平**（高崎・七蔵司・来鉢）**ユフ子**（高崎・七蔵司）**ハル**（詰・田代）**井手上**（詰・宮苑）**堂面**（七蔵司・内成）**鳥越**（七蔵司・高崎）**堀外**（高崎・宮苑）**トヲトコ**（高崎・七蔵司）**大下**（田代・七蔵司）**立平**（田代・宮苑）**穴井ノ久保**（七蔵司・宮苑・高崎）**古殿**（高崎・宮苑）**落合**（七蔵司・高崎）

（一）高崎の地名

高崎の名称は高崎山に由来する。「太宰管内志」は「多加佐岐とよむべし。名ノ義は高キ山ノ出埼有ルによれり」と記している。

高崎の地名が歴史上に初めて登場するのは永享五年（一四三三）である。

大友持直知行預ケ状（大分県史料三十一）に

「高崎　　高崎又五太郎跡」　　とある。

一所三拾七貫分

また、嘉吉四年四月五日（一四四四）に高崎尾張守棟治が由原宮に対し金亀和尚の御供田として、高崎村畑分二反を寄進した。この畑は「由原下馬林道越」の所であるとみえる柞原八幡宮文書の記事がある。（大分県史料九）このときには既に「高崎村」が成立しており、その範囲も「由原下馬林道越」すなわち現在の「机張原・下馬ノ木」を含んでおり、机張原地区は高崎村の内であったことがわかる。このように比較的古く高崎の地名が史料に出てくる。

伝承によれば安元元年（一一七五）左近亮又五郎なる者が石堂に居住し御霊社を建立、その子常陸のころ高崎村が誕生したという。御霊社の鍵取佐藤家に伝わる系図にも記載がある。筆者の調査では大友能直の六男・時景の庶子、一萬田次郎忠能が高崎に土着して高崎氏と号した。時期は一二六〇年代、弘長・文永年間と考えられる。前記の高崎尾張守棟治はその子孫である。高崎の地名はそれ以前に出来ていたであろう。

①　府内藩時代（豊府略記による）

高崎村

石堂・後村・水毛・本村・北ノ園・古殿・太治郎

新村

大迫・女狐

（語意・語源）

石　堂～石神信仰に因む地名。集落内に石祠が点在している。

本　村～のちの表のこと。組村の中核となる村、多くは惣庄屋の所在する村をいう。また枝村・新田・新村・小村に対する親村と同義に用いられる場合もある。ここでは分村で新村ができた時に区別する為に出来た地名。

水　毛～見付で高崎氏館の見張り処の意。

太治郎～大友時代・高崎氏の館、屋敷跡。のちにタシローまたはタジロと呼ばれるようになる。治郎は城の濁り音・ジロではないか。

古　殿～古い園で宮苑に続く柞原宮の菜園地の意。

北ノ園～古殿・宮苑と同じく柞原宮の菜園地。

後　村～位置指示を持つ地名には「前・後・表・裏・上・下・高・低」などがある。一般的に集落の北側が「後」であり、南側を「前」と呼ぶのが通例とみていい。ここの場合、「本村すなわち表」に対する後村という意味になる。「表」は「前」と呼ばれるべき地名である。御霊社の境内に四基ある石灯篭のうち最古のものに「元禄十四年辛巳年六月二日　後村」の刻がある。元禄十四年は西暦一七〇一年に当り「赤穂浪士討ち入り」があった年でもあるが、「後村」を確認できる最古の史料である。

大　迫～迫は湿地、小さい河谷の意味がある。大きな湿地の地形の意味か。

女　狐～メハルと読むが地元では古くからメハズ（一説にメハスとも）が正しいという伝承がある。語意・語源不明。「目歯頭」（めはず）がよくなる神様をまつる小祠があって、それに因む地名ではないかと、筆者は別府市北石垣にある「メハズ」の例から推定している

女狐の村社に保管されている最古の棟札に拠れば、享保十一年（一七二六）「願主葛城助右衛門」によって創建されたと記されている。この葛城助右衛門は女狐集落開設の中心人物で、高見家と葛城家三軒の計四軒が東院から移住してきたのに始る小集落である。この地区を古くから柞原神宮―千代丸―東院―阿南郷衙の道が縦断していたと筆者は推定しているが、千代丸から女狐に登る坂はかなりの難所であり、狐・狸も多かったといわれている。誰か風流好みの粋人が「目歯頭」に女狐という優雅な、しかし意味不明な字を当てたのであろう。高原三郎は「大分市机張原女菰（めはり）～はりは墾（はり）か」と「大分の地名」に書いているが、「めはる」を「めはり」に変え、女狐を女菰とするようでは独断といわれても致し方あるまい。異説としてあえて紹介しておく。狐は狸と並んで人を化かすといわれてきた。小玉洋美は県下各地に残っている狐に化かされた話を検討して「狐は女に化ける。道連れになって歩き、化かした元の

所へ連れもどす」というのが多いといっている（大分県の民俗宗教）。女狐の地名に関係あるのであろうか。いずれにしても難解な地名である。

この頃はまだ机張原は開拓されておらず大迫・女狐は新村に属す。新村は文禄三年（一五九四）早川長敏領の記録があり、江戸初期には村として高崎村から独立していた。

② 明治九年の神社合併願

明治九年に第三大区二十二小区（のちに石城川村となる）は神社合併願を大分県令森下景瑞に提出するが、その中に神社の所在地として五つの地名が記されている。

ホキノウエ（御霊社）～石堂川が大きく蛇行して崖（ホキ）を作っている、そのホキの上の意。現在の新貝。

ワカミヤ（若宮八幡）～表にあり、宮ノ辻または宮の下とも言う。

キフ子（貴船社）～北ノ苑にあり。きふねと読む

ドウ子ニ（秋葉権現）～表にあり、道寧寺の転訛したものであろう。どうねじと読む。

イナリ（稲荷社）～表にあり、惟福寺の境内にあったとされているところから、現在の惟福寺辺をイナリというのかも知れない。

③ 明治十五年（大分県各町村字小名取調書・東京大学史料編纂所蔵による）

表（水ヶ・古殿・林口・三ツ又・蛇石・下ノ原・堂ノ尾・堀外・楠平・宮ノ辻・越ト）

北ノ苑（河原田・落合・馬ノ瀬・押戸・打越・瀬戸口・仏ノ尾・腰ヶ谷）

高平（ヨヲセシツカ・百番石）

石堂（後・トヲミガウ・四良迫・大平・用着・葉山出）

焼野（水神森・コヲラコヲ・トヲトコ）

長田（平山・鳥越）

瓦ヶ郷（タカヅコヲ・トヲコヲボヲヤマ・上谷・中尾刎）

新村（北平・田ノ口・上野地・南平・大迫・寺林・鷺ノ谷・田ノ口林・一ツ石・刎木戸）

吉兆原（エンノキヨヲジヤ・ヨコイ・百間馬場・女狐裏・百田・芥神・下馬ノ木・五反田ノ久保）

女狐（セメクホ・ニシヒラ・ウチコシ・井戸尻・南平・穴井ノ久保・菅田原・諏訪ノ辻・高ホキ・水神森・桜平・アカマツヒラ・ヒライシヤマ・マエタ二クホ）

（語意・語源）

表～　前出の後村の項参照。通常集落の南側を「前」と呼ぶ。本来は前という地名であるべきところを「表」としたのであろう。

堀外～「懇（ほり）の内」で豪族屋敷（高崎氏屋敷）のまわりの意。

越ト～越は尾根を越えていくところ・トはトウで峠、すなわち峠を越えて行くところの意である。「駄つなぎ場」とも言われている

仏ノ尾～　ヲは峰で、仏様あるいはお地蔵様を祀っている峰（小野説）。

動詞のホドク（解）の転訛で「とけ離れる」の意から崩壊地形を表すとの説もある。

堂ノ尾～塔尾（トウオ）の転訛。トウ（高くなった所）・オ（峰）で同義反復の地名。

腰ヶ谷～谷の険阻な所。懸崖、崖、急傾斜地の意。関連して「城の腰」は豪族の本拠を囲む家の子郎党の住む集落の意味がある。

用着～用作と同意で、士豪の手づくり耕作地を指す。用尺・夕尺も同じでこの地は「ゆうじゃく」と呼んでいる

トヲミガウ～トヲミはドウメキと同じで、水音の響きに因む地名。ガウはコウ→ゴウで荒れた土地。崩落地を指すか。

葉山出～語源は早馬出（ハユマデ）でハヤマデに転訛して葉山出の字が当てられた。通称はハイマデ。伝承では常時馬を四～五頭置いた宿場という。（高崎今昔記）古代の高坂駅に比定される地名である。これについては後に詳しく述べる。

鳥越～鳥が決まって飛んでいく高いところの意。「尾根の中で決まって鳥の群が通過する低まったところ」の意味もある。

焼野～焼畑農業の名残。昔牧草を育て野焼きをしていたらしい。

コヲラコヲ～コヲラはゴウラと同じで、小石のゴロゴロしているような所。

コヲはコの長音で接尾語、「処」で場所を表す。

トヲトコ～トヲはトウで峰・尾根。トコは床で地盤・川床・尾床を表す。

タカヅコヲ～タカ（高）・ツ（接尾語）・コヲ（処）で高所の意。

トヲコヲボヲヤマ～トヲはトウ（山頂）。コヲ（処）、ボヲはボケルの語幹で「そそけ乱れた様子」→崩壊地形を表す。

下馬ノ木～「下馬林道越」を引き継ぐ古い地名。嘉吉四年四月五日（一四四四）高崎尾張守棟治が由原宮に金亀和尚の御供田として畑二反を寄進したがその土地が「下馬林道越」である。机張原に「下馬の木」があり隣接の金谷迫に「下馬の下」がある。

「下馬」は①下馬先の略で社寺の門前・城門の手前などの下馬すべき場所のこと。②キハ（際）、ケバ（毳）に通じ「ケバ立った様子、はっきり目立った様子」をいう。ここは地形からみて②が相応しい。

菅田原～スゲタハラという。すげの原野か。

エンノギョウジャ～役行者の祠がある所。放生池の傍の四差路にある。

吉兆原～机張原のこと。机張原の開拓に着手した安政二乙卯年（一八五五）の文書には「吉兆原」となっており、安政

六年（一八五九）に完成した溜池は「吉兆原堤」である。明治十五年の「大分県各町村字小名取調書」でも「吉兆原」で読み方は「キチョウハル」である。

大正六年に編纂された「石城川村郷土誌」に「机張原溜池」として「机張原」の字が出てくる。

④ 明治二十二年の地籍図（地図参照）

フルトノ・ヲモテ・タシロウ・北苑・ウシロ・平田・新貝・コエトウ・仏ノヲ・内河野・石堂・アリクヒ・ユフ子・高平・焼野・中ヤケノ・トヲノヲ・平山・東ヤケノ・ナカタ

（語意・語源）

ユフ子～ゆふねと読む。湯船のような形の湧出場をもつ温泉に因む地名。平成十四年、この地から五十八度の温泉が湧出して語源を立証。先人の見識が活きていた。

内河野～「ウチコウノ」のコウノは川野の意で「川流によって開けた原野・川の流域の原野のあるところ」を言う。ウチはその範囲の意か。

県内に多いが院内町に上内河野・下内河野がある。

高平～　高いところにある傾斜地・平野の意。

平山～　傾斜地が長々と続く山の意。

アリクヒ～アリは有で谷を表し、クヒは崩（クエ）が転化したもの。「崖崩れの多い谷」の意との説がある。

＊　机張原地区の地籍図が見つからないので旧小字名を記載出来ない。が現在の大字・小字リストをみてみると

大字高崎

小字～　キタヒラ・机張原（キチョウバル）・ケハノキ・桜平（サクラダイラ）・新村（シンムラ）・スケタ原（スケタバル）・高保木（タカヤスギ）・ナカタ・平田（ヒラタ）・南平（ミナミダイラ）・女狐（メキツネ）

となっている。（　）内は大分市役所の読み方。

（二）七蔵司の地名

ななぞうしは「七蔵司・七曽子・七曹子・七蔵子」と多様に書かれているが「なな」はナナオ（斜尾）の略、「ぞうし」は「そうれ（焼畑）」の転訛で、山麓の焼畑の意であるとの説がある。同音で速見郡には「七双子」村がある。現杵築市八坂で有名な七双子古墳のある所である。国学者物集高見は「（奈良佐宇之）は七蔵司の訛で昔七石庫に珍宝を蔵した跡であろう」と言っているが石城川の七蔵司はどうであろうか。また大分市古国府、羽屋地区の古い小字に「七曾子・上七曾子」の地名がある。豊後国府の比定地附近であるが、関係あるのであろうか。

いずれにしても意味・語源は不明である。律令時代に大宰府から豊後国府にいたる官道・長湯駅～高坂駅間のルートが七蔵司村を通っていたとする有力な説があり、古い歴史をもつ由緒ある村であると思うが、歴史資料上の登場は遅く江戸初期の「正保郷帳」には

じめて登場しているのは不思議である。

① 府内藩時代（豊府略記より）

（イ）七曾子村（元笠和郷十六ケ村ノ内）

都原城、椎山、原ノ平、上、後迫、市伊木、梁入田、瀬戸

大井、東、西、大久保、新屋敷、園

（語意・語源）

都原城～妻城とも書く。ツマは端・奥・隅の意、ジョウは山城で「端の砦・奥の砦」の意味か

後迫～後の谷の意

市伊木～イチヒ（櫟）のあるところ。庄内町の櫟木と同じ。

梁入田～のちに家内田→ヤナイカタと変化する。意味不明。

瀬　戸～谷間・両側から山の迫った狭い谷。谷間の狭まった所。

大久保～大きな窪地

新屋敷～近世の分村集落名。新たに屋敷地とした所。

園　～菜園地。

大　井～オホ（大）・ヰ（井・川、水路）という地名。

（ロ）山口村

瀬戸、龍尾、木ノ後、屋形、米山、木戸、立射地、御園、

曾尻園、奥、場治郎

（語意・語源）

山口は山・森林への入り口の意で宰水神が祀られることが多い。

龍　尾～タツ・ヲで高くなった所をいう。

木ノ後～木は城で、城または柵の後の意

屋　形～高崎山城に関係する地名か。中世豪族・武家などの居館の意。

米　山～円錐状の米を盛り上げたような形を指すが、「豊作を祈願するために使った丘陵性の祭場」の意もあるとか。白米伝説に因む地名だとすれば大友時代後半の比較的新しい地名となるが。

木戸～キ・柵とト・門で柵に作った門、城門。関所の門の意。高崎山城に関係ある地名か。

立射地～タテイデ・のちに立出と変化する。小野説では丘陵の端で、飲料水の確保がしやすい土地となる。出は水路の意とか。

御　園～神社に属する菜園の意。内成にもある地名。

曽尻園～曽尻の意味不明。園は菜園地。

奥　～深く入りこんだ所。沢などの上流。

場治郎～のちにハシロ・馬城とも書く。近接の高崎に太治郎の地名がある。治郎は城の濁音ではないか。染矢多喜男氏は馬城をマキと読んで牧場の意と説く。

② 明治九年の神社合併願

仲園～　山神社（七蔵司）のある所
タニ～　山神社（山口）のあった所

③ 明治十五年（大分縣各町村字小名取調書）

妻　城（落合、ヤナバ、ヲカタ渡リ、徳堂、イノムカイ、上ハツル、イノモト、ロンチバ、女良カホキ）
後　迫（カゴスヘバ、ニシヒラ、ソヲヅ、ムカイビラ、亀ノ石）
家内田（ハサマタニ、ミミズダニ、ムカイヒラ、ウシノ子バ、小畑、ナカダイ、四良迫）
三保田（渡リケ元、穴井ノ久保、長久保、三ツ石、鳥越、センドガ畑、フスベノ、ワロヲガタ、丸畑、セニガメ、タカツクミ、酸絜鬼畑、カヤワラ）
大久保（ノグロ、河内、クワンノンバタケ、ナカゾノ、堂面、ジバ）
櫟　木（ケサノマエ、タノキビラ、コマチボリ、久保苑、エノキガモト）
馬　城（押戸、堀田）
山　口（下谷、穴井ノ前、クチキノモト、堂面、平原、ハチクヤマ、下田、ウバガトコロ、内河内、垣外、センタクホ、仏ノ尾、大野地、腰ケ谷、ナカヲノ、ツジ、シモノジ）
米　山（高平、白ハケ、ツツラワラ、金山、クスカヒラ、ウソ、大将軍、峠、酸絜鬼畑、カヤハラ、シイノテ、フキアケ、三枚田）
木ノ後（ウマタテバ、ジンノダイ、シズノモト、湯舟、ハバリガワ、立石久保、フジカミ、ドヲトコ、瀬戸口、峠ノ辻、弐里木）

（語意・語源）

ヤナバ～ヤナ・バで①柳の木の植生による地名　②畑の縁の斜面の意

ロンチバ～論地場か。①境界、水利権等が論争の対象となった土地。②提防、田畑の畦畔。③ドンダ（泥地）の転訛。

カゴスエバ～カゴは古語のコゴシの語幹・コゴの転訛で岩、岩壁、崖などの険しい地形を指す。スエはツエ（崩）、バは（場）。

ソヲヅ～泉、清水の湧き出る所。詰の綜津川と同意。

三保田～ホ（秀）・タ（処）で水平方向に突き出した所をいうか。小野説はミホ→ミヨ→ミオ（水尾）で水溜まりの意という。

センドガ畑～セ（背）、ノ、トウ（峠・山頂）で山の上の畑の意か。兵庫県の方言では墓地という意味もある。

フスベノ～フスベは「イボ・瘤」の意の古語で「瘤状に盛上った地」。

酸漿鬼畑～「ほおずきばたけ」は三保田と米山にある。以下は米

山についての伝承である。

「(二十四) 高崎山の落城と孝女の話

(此の口碑は、提出者が幼少の頃、母から聞いた話である。母は天保年間に生まれた人で、郷家を〈高崎〉と称し、其祖先は大友氏に従い、武功あって高崎姓を戴いたといひ、昔は高崎山附近に其領地があったとさへ云って居ました。此口碑も同家に言ひ伝えられたものと思われます。)

昔大友氏が高崎山に、城を構へて居た頃、敵軍のため囲まれたことがあった。此時城中には水が欠乏して、今や落城の運命に陥ろうとしたとき、ある白髪の老女があって、山下から毎日水を汲み上げて呉れたので、軍兵等皆渇をうるほすことが出來た。所が此老女は敵の間者であらうということで、終に殺されてしまった。そこで城中にはいよいよ水が無くなり大に困った。けれども敵に其事を悟られては、甚だ不利であるから白米を水と見せかけて、山上から流したが遂に支へることが出來ないで落城した。後世、此山に野生の酸漿のあるのは、此白米が化して生じたのであるといふ。

(大分縣郷土傳説及民謡・昭和六年大分縣教育會編)

クチキノモト〜クチキはクヅ(崩)、キ(接頭語)の転訛で崩壊地形。

ウバガトコロ〜①ウバは岩または崖地を言う(松尾説)

②ウバガフトコロのフが抜けた形。自然に風を防ぎ南面して日当りがよく乳母の懐にいるような地形の所を言う。

センタクホ〜セマ(挟)、タ(処)の転訛。狭い窪地のこと。

大野地〜野地は痩せた土地のこと。

白ハケ〜ハケは崖、山の斜面の崩れた所。白は接頭語か。

ツツラワラ〜ツヅリ(綴り)と同じく「重ね合わせた地形」の意か。ワラは原。段差のある所をいうか。

クスカヒラ〜楠の生えている原の意か。

カヤハラ〜(茅・萱)・原で草原の意味か。

シイノテ〜ノテは野手で広い原、椎の木が生えている広野か。

フキャケ〜吹上で風が吹上げる高みの地形。遠望の利く所。

ウマタテバ〜①立場、建場で馬を繋ぐ場所 ②近世、宿場の間で馬や駕籠の休憩、引継ぎを行った所。

ジンノダイ〜陣で兵営、陣営、陣地、陣屋などが置かれた地をいう。また合戦が行われた地を指すか。ダイは台。

シズノモト〜シズはシミズの転訛で清水の湧き出る所、泉の下の意。一説にはシヅ(垂、下)で垂れ下がった状態をいい、断崖傾斜地をいうとも。

ハバリガワ〜ハバリは小石、砂利の意。

フジカミ〜フジは縁(フチ)又は淵(フチ)の濁音化で淵の上。小野説ではフシは柴の生えた痩せた土地の意になるという。

弐里木〜府内からの距離が弐里であるとの里標。石碑が現存している。

堀田〜①新たに開かれた土地・新田。②私的に開いた地・へそくり田・隠田③小規模な開墾で極く小さい田。

② 明治二十二年の地籍図（図面参照）

ツマガジョウ　ウシロサコ　クボノソノ　ハシロ　東
イチギ　大久保　トウメン　山口　ベンテン
ウチカワノ　下谷　平原　カヤワラ　ヤソヲ　大下
ユフ子　立石久保　フシカミ　セト　フモト　ウソ
銭亀　タカノス　中原　ヤナイカタ　小畑　向平
四郎迫　立出　ミヨタ　城ノ坪　コシノ

（語意・語源）

クボノソノ〜窪地の中の畑の意。

ハシロ〜場治郎—馬城と変化してハシロとなった。マキとも読める。

トウメン〜堂面・道面を当てる。神社などの堂の経費を維持するために田租を免じられた田地のあるところを「堂面」という。山神社のある所なのでおそらくこの意味であろう。ドウメンからの転訛。別に「銅免」で鍛冶に関係する地名とする説もある。

ベンテン〜弁財天のあった所の意か。

ウチカワノ〜入り込んだ谷や川岸の意。高崎にも同じ地名あり。

下谷〜下方にある谷の意。

カヤハラ〜茅の生えている所。

ヤソヲ〜「日かげのある谷間、背後の湿地」の説あり。

大下〜オオシモと読む。田代にもあり元の字は大霜であった。

ユフ子〜ユフネと読み、高崎にもある。温泉に関係する地名。

フシカミ〜フシは柴の生えた痩せ地を云うとの説あり。

フモト〜麓の意。

ウソ〜「崖下・山崩れがあった土地」説あり。鷽の住むところの意も。

銭亀〜亀は瓶に通じる、銭には狭い場所の意もあるという。

タカノス〜鷹が巣を造るようなところの意か。

ヤナイカタ〜梁入田→家内田→ヤナイカタと変化している。

四郎迫〜四郎は城・白の当て字で「城に近い谷」または「白い谷」の意味であるとする説あり。高崎にも同じ地名あり。

立出〜立射地の転訛ではないか。タテイデと読む。

城ノ坪〜坪は庭の意で「砦の中の土地、城内・砦内」の意か。高崎城に因む地名であろう。

（三）来鉢の地名

来鉢の地名の初見は乾元二年五月（一三〇三）、豊後国阿南荘松富名半分新田畠実検帳案に「一来鉢井窪分」とみえる大友文書（県史料二十六）である。

この中に「ふちた・おとし・くちら・おき・くわはら・たのひら・あかふち・なへ・きたかわ・みやかわ・くゑふち」などの地名

がみえる。来鉢の語源は地形が鉢状、すりばちのような形をしていることに由来する自然地名か。地名用語語源辞典によれば「①クマ・チ（接尾語）の転訛　②クボ（窪）・チの意か」とある。旧村級では全国でもう一つ宇佐郡来鉢村がある。現在の宇佐郡院内町大字来鉢で地名の由来は「駅館川の上流、恵良川の最上流部。西椎屋の滝の下流の西椎屋地区の対岸で、耶馬溪溶岩の崖下にすり鉢の縁に階段耕作の水田をもつ集落。」（大分百科事典）とあり、要するに鉢状をなす地形に基づく地名という。石城川の来鉢も地形に基づく自然地名ではあるまいか。梅木秀徳によれば

「県下に八久保（ハチクボ）というのが三十ヵ所ある。ハチの発音を持つものでは、ほかにハチ久保七ヵ所、蜂久保三ヵ所、鉢久保十一ヵ所があり、臼杵市乙見に擂鉢久保がある。つまり鉢のような凹地のことで、八久保も蜂久保も鉢形の窪地が起源である。」（大分の地名）

来鉢地区には金亀和尚にまつわる「来鉢由来伝説」がある。雉城雑誌・和尚権現の項に「天正七年三月三日ノ夜、宇佐八幡菩薩ノ神勅ヲ得テ、空鉢ノ法ヲ修行シ、神明垂迹ノ因縁アラン地ニ留リ玉フベシ迚、哭願アリテ、跡ヲ追ヒ、当国ニ来玉フノ所、空鉢此所ニ止ル。因テ来鉢村ト号ストゾ。当村其以前ハ楠村ト称シタル由也。」とある。天正は天長の誤りである。

一方、来鉢神社由緒（加藤照廣氏解説）によれば「貞観十年六月十一日（八六八）、金亀和尚が比叡山に帰るに際し、鉄鉢を空中に投げ、この鉢の落ちた処が我が死後霊魂の安ずる所なりと言った。この空中に投げた鉢が蛙ケ原の武内宿禰命の社地に落ちた。和尚は翌年十一月十一日、比叡山で亡くなったので、柞原神社は特使を派遣し、武内社の相殿に合祀し、社号を権現と改称し和尚権現・和尚社と呼ばれた。また蛙ケ原の村名を来鉢村と改めた。」とある。鉄鉢は宇佐神宮から天長七年に投げたものと、柞原神宮から貞観十年に投げたものと二説が混同されている。これに関連して大分縣教育會が昭和六年に編纂した「大分縣郷土傳説及民謡」には

「（二十一）鉢石

昔柞原に金亀和尚といふ人があった。非常な信仰家で、特に宇佐八幡を信仰し毎月月参りをして居った。和尚吾が霊の鎮まる所を鉄鉢を以て占はんと西に向かって投げた。之が石城川村の森に落ちた。而し此の地意に満たず、再び投返した所、現在の鉢石に當り鉢の型を止む。後來之を鉢石といひ伝へてある。石城川村来鉢の森に、其の鉄鉢を記念する為めに和尚様を祀る。之が現今の和尚様であるといひ伝へてある。其の鉢石は八幡宮参道の側にある。金亀和尚は、人皇第五十三代淳和天皇の御代であって、比叡山の僧である。（出所・大分郡八幡村柞原三重渡）」とあり、金亀和尚の投鉢伝説は多様である。伝承の面白さであろう。

また「来老」（来鉢老人クラブ編）の古老聞き書きによれば

「八の窪

これは金亀和尚が比叡山に帰るとき鉄鉢を空中に投げたが、このとき投げた鉄鉢の破片が八つにとび散って、それぞれの破片の落ちた所が窪地になったという。これが八の窪である。現在二ヶ所比定

地がある。」と地名の由来を解説している。このように金亀和尚の投鉢伝説は来鉢地区にいろいろな形の伝承を残しているが、来鉢住民にとってそれだけ金亀和尚が身近な存在であったのであろう。

それはともかく来鉢の地名には地形からくる窪地・湿地を表すものが多い。

① **府内藩時代**（豊府略記より）

古園、無田、竹ノ中、一ノ原、板屋平、袋、鬼塚、杉ノ木、辻、法師園、小影木、中園、竹ノ上、目ノ子迫、荻ノ尾、なら山、くぬぎ山、綿田、芦松、影ノ木、下来鉢、平石、底津留、西鍋、久保津留、丸田

（語意・語源）

古　園～園は神社の菜園を指す。

無　田～湿地、泥田で牟田と同じ。柳田国男によれば「ムタとは水が溜まってその儘では水田にならない所を人工を加えて水田にした地名である。」（地名の研究）久住の千町無田も同じ語源である。

袋　～袋形の低地、低湿地の意。袋尾とも云う。

鬼　塚～①鬼に因む伝説のある塚②ヲネ（尾根）ツカ（塚）で高いところの意。

影ノ木～影は日陰、木はキで土台、棚の意。日光がささない所（小野説）。

竹ノ上～竹は崖で、高いところをいう。

目ノ子迫～「めのこ」はおんな、おみなのこと、転じてやさしい迫の意か。

広辞林では「目の子～めのこざん」とある。

なら山～自然地名

くぬぎ山～自然地名。

綿　田～①ワタ（渡）・タ（処）という地名　②綿花を栽培する田の意。

西　鍋～鍋のような地形の意。

辻　～交差路

芦　松～①アシ（悪）、マツはうしろ、奥で「交通の困難な奥まった所」の意。

②山の裾、麓の意もある。ここは②が相応しいか。

底津留～津留は川流に沿った平地のことで、由布川に沿った低い平地の意。

久保津留～窪み状になった平地のこと。由布川の川流に近い所。

② **明治九年の神社合併願**

カウスキ～玉垂社のあった所・中園、コヲスキの書き誤りか

天神前～　天満社のあった所・下来鉢

丸田～　御中主社のあった所・今の丸田

コヲスキ～歳神社のあった所・カウスキと同じか

神社合併願には「右三社字コヲスキ玉垂社江合併」と記載されている。

「来鉢神社沿革」（加藤照廣氏）によれば、来鉢村にはこのほかにもこの時に取消しされた社が次の通り四社あった。

ヤジロウ～金刀比羅社のあった所・西辺
ツル～　貴船社のあった所・下来鉢、影ノ木に二ヶ所あり
マエ～　歳神社、山神社のあった所・下来鉢のツルの西隣
ゴズ～　御座八幡社のあった所・影ノ木の公民館北側

なおまた来鉢神社「由緒資料」の中に「金光寺書類」があり「延暦寺の上人金亀和尚が字テラトコに堂宇を創建し、金光寺と称したという。字テラトコの地は芦松の背後の山腹、ミミズ谷に臨む地域一帯で、今この界隈に鉄牛禅寺がある。」とのことである。

③　明治十五年（大分縣各町村字小名取調書）

西辺
中苑（竹ノ上、猪ノ久保）
鉢ノ久保
辻（市ノ原）
無田（竹ノ内）
目ノ子迫（藤田）
袋
萩尾（平原、椚山）
芦松（矢櫃）
影ノ木
下来鉢（古苑、上屋敷、今在木）
丸田

（語意・語源）

西　辺～西鍋の転訛
鉢ノ久保～久保は窪地のこと。鉢のような。凹地を表す。
今在木～今在家の誤りか。荘園地名の一種。
矢　櫃～崖に挟まれた凹状の地を示す語。または矢櫃に見立てた地名か。

④　明治二十二年の地籍図

フクロヲ、ヲギノヲ、ヲトシ、フ子、フジタ、メノコザコ、サヤ、小川ノ上、クヌギ山、ヲワサダ、ムタ、辻、マイノハル、下来鉢、ナカゾノ、カゲノキ、ノダクボ、アシマツ、シバヲ、ハイザコ、ドヲゾノ、上ノツル、トビカス、ニシナベ、タカヒラ、ヤビツ、

（語意・語源）

ヲトシ～乙字形に曲がったところの意。その崖を指すことが多い。
ハイザコ～岩のごつごつした迫の意。ハイは岩・灰を表す。
サヤ～「鞘・幸・佐屋・佐谷・佐野・小夜・道祖」などと書く。サ（狭）・ヤ（苑）で湿地、狭い湿地を言う。本村の近

くに開墾した分村の意もある。

ヲワサダ～早稲の田の意か。

ノダクボ～ノダは湿地、クボは窪地。湿地の中の窪地の意。無田と同じ。

マイノハル～マイは舞で「舞の原」の意という説あり。お宮の祭事やご神幸のとき、ここに仮御殿があって神楽を舞って奉納していたのでこの名がついたとは地元の古老の話。マイはマエで「前の原」ではないかの説もある。

トビカス～意味不明。

（四）田代の地名

「古代人は原野を開いて田をつくったとき、田のある一画を田代とよんだ。

これは自然を司る神から人びとが田をつくるために占有した土地だと宣言するものであった。田代の地名はこのようにして出来た。」という説がある。

鏡味完二氏は「峡谷を越えて入りこんだ山間の小盆地にある地名で、田をこしらえたところ、すなわち新田または高山の湿地をなす小平地。タシロとは田を開いた所の意で新田とほとんど同じ」であると説く。また丹羽基二氏は「田の料（シロ）、すなわち稲のことで、新田開発して田代を収穫することから開発新田をいう。」と説く。平野よりもむしろ山中に多いが水田適地ということであろう。この他にも①水草などの生えている湿地②開田予定地。山間、沢のカツチなどの開田可能地。③高山の湿地をなす小平地④田のある所、田地。などの意味がある。全国的にある地名だが東北や九州には極めて少ない。

田代村の歴史上初見は、天正七年（一五七九）八月吉日の、阿南庄狭間南方四百貫分覚（甲斐守文書）に「田代村」とみえる。明治八年中畑村・平床村を合併して田代村となるが、中畑村も平床村もともに正保郷帳（一六四七年）に村名がみえる。

①　府内藩時代（豊府略記より）

田代村

大霜、東、後山、登龍、可佐、久保、田迎、権蔵、うる迫原、夜ふ園、田釣迫

中畑村

中畑、向山

平床村

平床、本村、小明婦

（語意・語源）

大　霜～しもはシボム地形の意で「大きくしぼんだ地形」を表すとの説がある。

登　龍～意味不明。登竜門のような急な瀬をいうのであろうか。

可　佐～かさは笠の意味か。下笠の地名がある。かぶり笠のような地形を云うのであろうか。

久　保～窪地のこと。

田　迎～のちには田向と書かれている。向には正面・前面の意味があるので水田に面しているところの意か。一説には田に沿った町屋の意もある。またタは接頭語でムカヒと同意とも云う。

権　蔵～広辞苑によれば（イ）ごんずわらじ、（ロ）人足、仲仕などの称とあるが、ここは権蔵なる人物に関係する地名か。川向いの朴木地区に権蔵ツルという地名がある。ツルは小平地または小低地の意。

うる迫～「うる」は潤・ウルフの語幹で湿地の意。　迫は集落近くの谷地につけられる地名。

原　～平地のこと。

夜ふ園～意味不明。園は神社の菜園地のこと。

田釣迫～釣には「上のものにかけて下げる・上のものにかけて持たせる」の意味がある。迫は谷地。

中　畑～中間の畑地の意で開墾地か。畑作地域に多い地名。

平　床～広い川床のあるところの意。

小明婦～「命婦」には稲荷の神の使であるといわれているキツネの異称の意があるのでそれに関係ある地名か。

②　明治九年の神社合併願

大　下～　山神社、現在の田代神社のある所

ミヤノ～　龍神社のあった所

ツ　ル～　天満社のあった所

宮ノ元～　水神社のあった所

コザコ～　龍神社のあった所

川　上～　天満社のあった所

③　明治十五年（大分縣各町村字小名取調書）

平床（小明婦、向山）

大下

平

中畑（立平、名子山）

田向

風呂迫

堺

城司

（語意・語源）

立　平～立ては険しいことで、険しい台地・坂道の意

名子山～ナコは「小平地」、ヤは湿地、マは間で場所。湿地のある小平地または台地の意味になる。

堺　～境界、区切りの意。

城　司～ショウジの転訛か。①岩壁や光峰を障子に見立ててつけた名。②精進潔斎をした所。③荘園の管理に従事した「荘司・庄司」に因む名か。

風呂迫～フロは浅瀬で水の温むところ、「水が温い、浅瀬のある谷」の意。

鏡味説は「フクロと同意で袋迫という意味になる」とする。

④　明治二十二年の地籍図

赤迫　大下　大苑　堺ノ谷　ナコヤマ　ナカ　ムカイ

マツハラ　コニヨフ　向山　田向　コンソウ　ハル　シモタイ

カミタイ　フロノサコ　センホウ　平　山ノ下

（語意・語源）

赤　迫～赤土の多い小さい谷、または湿地の意

大　下～大きくしぼんだ地形の意か、大霜の転訛したものか

大　苑～大園と同じで菜園を表す。神社の所有した菜園との説もある。

堺ノ谷～堺は境で、村境の谷の意か

ナコヤマ～名子山とも書く。湿地のある小平地の意

ナ　カ～那賀・那珂と同じ意味をもち、土地を表す

コニヨフ～小明婦の転訛したものか

フロノサコ～風呂迫とも不論迫ともいう。

（五）内成の地名

内成の歴史は古く、弘安図田帳に内梨畑とあるのが初見。史料上では内梨子村とも書かれている。蒙古軍の来襲があった（弘安の役）直後のことで西暦一二八五年頃のことである。地元の史料では、長禄二年（一四五八）の「小平の山神社」の棟札に「内梨内下尾平山神御宮之事（以下略）」と内梨の地名が見える。正保郷帳（一六四七年）には内成村として出ているので中世末期には内成と呼ばれていたのであろう。石城寺の僧・加納山佛海が明和七年（一七七〇）に著したといわれる「梨洞山石城寺略縁起」によれば「内成」とは「唐土龍門カ滝四十八口の内成り」との謂いであると説いているがどうであろうか。俄かには信じられない。また一説には同略縁起にある「鳴瀬谷々鳴り渡り」を引いて、川水の流れ音をあらわす呼び名から起こったものであるとするものもある。

もともと、地名伝説はそれ自体が地域住民の精神生活史の一班を物語る貴重な資料であるが、だからといってそれがあたかも真実の地名由来であるかのように扱われるのは大いに問題のあるところであろう。筆者は、本来「内梨」であったものが、ナシを忌み嫌って、ナリと転訛したものであろうと推測している。石城寺の山号に「梨」の字があることが何よりの証拠である。さらにいえば、宝亀・延暦の昔からの地名であれば、鎌倉時代に「内梨子村」などと記録されることはないであろう。

もともとの「内梨」の語源について地名用語語源辞典（楠原祐介著）によれば

○うち〈内、打、裡〉

① **ウチ（内）で「内側」の意。とくに「入り込んだ地形」、「山谷の小平地」**

② ウチ（内）は、血族的集団を意味し、「氏」と同語源か。

③ 入江、入海の湾内

④ フチ（縁）の転か。↓ふち。

⑤ ウチ（打）で、崖などの「切り取られたような地形」をいうか。オチ（落）の転とも考えられる。↓おち。

⑥ 鹿、猪などの通る道。

⑦ ウナ・チ（接尾語）の略か。↓うな。

⑧ 強意の接尾語

○なし〈成、梨、生、無〉

① 接尾語。「～になった所」の意。動詞ナス（成）の連用形より。

② **ナラシ（平）の転で、「平坦地」、「緩傾斜地」をいうか。↓ならし。**

③ ナシ（無）の意で「～のない所」をいうか。

④ **ナシル（擦。「当ててこする」）の語幹で、「こすられたような地形」、すなわち「崩壊地形」を示すものもあるか。**

地名の語源の殆どが地形を基にした自然地名であることから筆者は、「ウチは内側の意で山間の入組んだ所を指し、ナシはナシル（擦）の意で、こすられたような地形・崩壊地形、を表わす自然地名」であると思う。

村の一番高い所・石城寺から眺めれば、平均勾配十分の一の棚田が一面に広がっている。まさに擦られたような地形であり、この村の景観を見事に表現した地名であることが理解できる。

① **府内藩時代（豊府略記より）**

下畑、仁田原、上洗、下洗、うと、八郎迫、大久保、田ノ口
平ノ園、野地、勢家、天神谷、御園、蓮台寺、丸山、
仁田尾、船川、板ノ平、中ノ迫、梶原、井ノ向、久保ノ山
古河内、猿山、御申、松葉、椎葉、太郎丸、迫、上ノ園
石上寺、山際、南、宇曽ノ尾、神林、立添、中園、八木谷
鎰掛、詰、おく詰、小平

（語意・語源）

下　畑～下の方にある畑。

上洗・下洗～洗は①新井・新しい川筋　②荒井・暴れ川③粗井・崖になった川などを表すが　④新居で新村の意もある。

う　と～ウツ（空・虚）の変化した語。全国的に、崖から洞窟、波打ち際に至る「崩壊地形・侵食地形」を示す用語である。鏡味説は「鈍頂の山や丘」。侵食谷によって残された台地の平坦面を言うのかも。

八郎迫～迫は谷地のこと。八郎は人名であろうか。

大久保～大きな窪地のこと。

野　地～やせた土地。焼畑の意。
勢　家～清・勢はセ（瀬＝急）・ヰ（井＝川）の意で「瀬になった川、急流」をいう。勢家も勢場もこれに関係する地名か。一説にはセ（狭）イ（井・水）ケ（接尾語）でケは状態、状況、様子を示す接尾語とみて狭い川の流れている処の意という。
船　川～①ウナ（畝・尾根）カワ（側）で尾根、岡のそばの意
②クナ（曲）カワ（川）か→くなかわ。
猿　山～サラ・サリ・サレなどの転訛で断崖の立岩、崖地、突出地を指す。
梶　原～カジは鍛冶の意という説もあるが、植物のカジノキではないか。
船のカジ（舵）にこの木を使ったから、舵すなわち「船尾」の木という意味で梶の字をカジノキ、略してカジと読むという。
御　申～仁聞菩薩が宿った入船屋敷の主が申し上げたという故事。
仁田原～仁田は湿地を表す。二田、新田も同じ
御　園～神社に属する菜園の意。大神峯神社の菜園か。
太郎丸～丸は、ほぼマルく一廓をなした地形に名づけられた地名。
「～丸」という地名は全国的に多く分布している。鏡味説では「いくつかの丸い丘のあるうちの第一番」を太郎丸という。
詰・おく詰～きわ・はしの意で境や奥まった所を表す。野津原に上詰・下詰があり同じ語源である。
小　平～ヒラは傾斜地・急傾斜地を表す。
石上寺～現在石城寺のあるところ。
山　際～山のきわ。山のほとり。山麓下。
立　添～意味不明
鎰　掛～本来は「峡崖」ではないか。峡（かい）は急な崖に挟まれた峡谷、あるいは山間の盆地の意味。鎰掛の鎰はカギと読み「先端が直角に曲がっていて、錠の穴に挿し込んで扉を開ける金具」をあらわす。神社の鍵の保管者または神殿の扉を開ける役目の人を一般に「鎰取」というが、これに関係する地名であろうか。
宇曽ノ尾～（獺・宇曽・宇楚）。獺の棲息による地名もあるが、アトリ科の鷽鳥に因む地名もありうるか。
神　林～神社に付属する林の意か

①　明治九年の神社合併願

ヤマノカミ～大神峯神社のある所
ウラ～　山神社のあった所
カマノソノ～明神社のあった所
ヲサキ～　神明社と稲荷社のあった所
ツルタニ～　天満社のあった所
テンジンビラ～天満社のあった所
ナカミソノトトロ～山神社のある所

ミナミ～　山神社のある所（詰）
トシノカミ～歳神社のあった所（詰）
アラテワキ～加久良社のあった所（詰）

③　明治十五年（大分縣各町村字小名取調書）

鶴（御苑、仁田ノ原、下モ旗、勢家、狭間、丸山、船川、山ノ神）
中ノ迫（的場）
梶　原（御申）
山　際（石城寺）
岩　水（中苑）
勢　場（長田）
太郎丸
鎰　掛
詰　（小平、西ノ鶴、原、西）

（語意・語源）

鶴　～ツルは津留、水流で平地を表す。
下モ旗～下畑、下方にある畑の意。中畑などと同じ。
狭　間～ハサ（挟）・マ（間＝場所）で谷間をいう語。二つの谷に挟まれた地を指す。
的　場～弓を射る場所。狩場の意もあるか。
長　田～細長い田。田の美称。高崎にも同じ地名あり。
西ノ鶴～鶴は津留、川流で川にそった平地の意。

④　明治二十二年の地籍図

アライ　ウト　ヲオノコウチ　アライヒラ　ヲサコ　ニタノハル
シモハタ　ツル　ヒカサコ　ヒラノソノ　テンジンヒラ　ミソノ
コガノハル　ハサマ　セイケ　ヲサキ　栗ノ木　迫　フ子カワ
中ノ迫　セイハ　中田　太郎丸　園田　ヤケクロ　ヲカキ　谷尻
神ノ園　石城寺　コマツタイ　ウソノ　丸山　前塚　トタイ
立石　トトロ　ヤマキワ　イタカヒラ　トヲメン　オクタ　片平
梶原　オモウシ　木ノ下　ヲハタケ　オモウシシタ　ユワスイ
カイカケ　フナキ　カイカケノシ　サカイ

（語意・語源）

ヲサキ～山の背筋のさがった先端。ヲ（峰）・サキ（先）の意。
ヒカサコ～ヒカ・迫か。
コマツタイ～小松・平（台）。松の生えている平地・台地の意か。
ウソノ～詰にも同じ地名あり。ウゾ→ウド→ウドノの転訛であるとするのは小野説。筆者は宇曽の尾の転訛とみる。
イタカヒラ～イタカ・平かイタ・ガ・平か。いずれにしても平地・台地。
トヲメン～銅免の転訛で鍛冶に関る地名であるとする説があり、梶原は鍛冶原であるとする。「堂面」は神社などの維持費用に当てるため田租を免ぜられた土地を云う。梶原神社の近くでもあり堂面―ドウメン―トヲメンと変化したものであろう。

トトロ～とどろ（轟）の転訛。動詞トドロク（響）の語幹で「水音の響く所」を云う。方言では滝・急流・淵を云う地方もある。

（詰地区）

コヘヤマ　テクチ　ナカツメ　オクツメ　ミナミ　ニシノツル
タイ　フカサコ　ヲヲハタケ　ミヤノモト　ハル　サカイ
ヲヒラ　キリノキ　ナノメヒラ　イテウエ　ムカイウソ　ウソノ
ユワスイ　ヲトリハ

（語意・語源）

テクチ～ヰデクチ（井出口）の下略形で「田の水口」「用水路の取入口」を云う。他に出口に当る所を指す場合もある。

タ　イ～平・代の字を当てる。山と山との間の低湿地。

ユワスイ～イワは岩・山・硫黄の意あり。硫黄の混じった水または流れの意味か。（小野説）

ハ　ル～開墾地・平地の意。

キリノキ～キリヤマ（焼畑）・切畑と同じで焼畑から開墾地に近い地名。

フカサコ～深迫か。草深い迫のあるところの意。

ナノメヒラ～ナカノメは低湿地の中の小島状を指す。ナノメはナカノメの転訛か。（小野説）

ヲトリハ～村里を離れた場所で虫送り・亡霊送りをするところの意か。

オドリバは踊り場で盆踊りに関係ありとの説もある。

コエヤマ～コエはクエ（崩れ）をさす、山崩れ。

ウソノ～ウゾーウドーウドノ（藪野）の転訛説は小野説。筆者は宇曽の尾の転訛とみる。内成にも同じ地名あり。

（六）宮苑の地名（現大分市）

古くは宮園とも書かれたが宮苑が本来の語。柞原神宮の園・菜園地に由来するものであろう。みや（宮）はミ（御）・ヤ（屋）で①神の居る所、神社　②天皇の住む御殿・御所・行宮　③神社に供された地、神領も含む、などの意味があるがここでは①と③。筆者は、より狭い範囲に考えて現在の上宮苑地区、日吉神社周辺の畑作地域を指すものとみている。宮苑・中村地区は高崎谷からの水流によって太古・弥生時代から水田耕作が発達していたことが考古学資料で裏付けされている。千代丸古墳や中世の宮苑遺跡はこの地が古くからの水稲生産による経済力の高さとその蓄積の豊かさを証明していると言えよう。「正保郷帳」に宮園村三八二石余として出ているが江戸期以降の村名である。宮園・宮苑としての歴史資料上の初見は遅いが、同じ地域を表す千代丸名は嘉元三年（一三〇五）、二月の由原宮年中行事次第に見えるのが初見で、鎌倉・室町期に登場している。史料上では千代丸、千代丸名、千与丸と混用されて記載されているが宮苑の代名詞的地名であることに変りはない。千代丸古墳と千代丸名について以下に概観してみよう。

千代丸古墳と中世千代丸名

旧宮苑村のほぼ中心に位置する千代丸古墳は六世紀末に築造された横穴式円墳である。大和地方を中心とした豪族達の連合によって大和政権が成立した三世紀末～四世紀初めに始る所謂古墳時代は、仁徳陵や応神陵に代表される大規模な前方後円墳の築造に始まり、政権の浸透とともに各地に広まったが、後半期には巨石を使った横穴式の円墳が多く作られるようになった。千代丸古墳が作られたのはその古墳時代の後期にあたる。稲作を中心とする農業生産の発展を基盤にして成長した豪族や在地の首長が出現したことは、この古墳という大規模な墳墓の造営によってよく理解される。一面において、古墳は階級分化の結果物と見ることができるのである。千代丸古墳の被葬者については国造・大分君の一族であろうといわれているが定説に至ってはいない。千代丸を中心とした宮苑・東院地区において、一般の農民とは隔絶した支配者階級たる豪族・首長が突然に現れて、その権力の表徴として大規模な古墳を造営したのではなく、弥生時代に始った稲作農業の発達に伴い漸次階級的分化が形成されていったのであって、相当長い時間の経過があったであろうと思われる。

先年中村地区から弥生時代の遺物が発見され、この地における水田稲作の古い歴史を証拠立てたが、それを可能にした自然用水の便は高崎谷からの湧水によるものである。

大分市教育委員会が一九九八年度に実施した「中世賀来荘の歴史的景観を復元する調査」（ＦＵＮＡＩ・府内及び大友氏関係遺跡総合調査研究年報　Ⅶ）には宮苑地区の詳細な耕地利用状況と用水利用状況が報告されており、実に貴重な資料である。同報告書の用水利用状況調査の説明を以下に引用する。

（大字宮苑字千代丸地区）

「大字宮苑のうち賀来川左岸、字千代丸を中心にした地区で、千代丸名の故地に比定されている。この地区の用水は地区内を流れる賀来川支流の宇曽谷川を境に二つの地域に分けられる。右岸地区は宇曽谷川の谷筋で取水し、灌漑する。その水は宇曽谷川と賀来川に落ちる。左岸地区はほぼ圃場整備が終わっている。北側丘陵から流れ出る小川や自然水を給水源とする。旧字図にもある地区中央の荒平池は水不足時にのみ使用するという。水は宇曽谷川と賀来川に落ち、一部荏隈郷井手にも落ちる。荏隈郷井手の取水口より上流部に位置し、その影響は受けていない。現在の給水源状況からみて、中世段階でも水田耕作は可能であろう。」

①　府内藩時代（豊府略記より）

高崎口、古殿、千代丸、寺山、中村、井上、角ノ前、台ノ田

鶴蒔田、田ノ口、立平、小迫、葉毛、荒平、田原、塚田

（語意・語源）

高崎口～高崎への入り口。現在の道筋と違って当時は石城川沿いに道が通っていたから高崎へはかなり急な登り坂となる。

古　殿～古園の転訛で柞原神宮の菜園地

千代丸～①チ・ヨという地名。②センダイに千代の文字を当て読み替えた地名。③瑞祥地名　とあるがここは瑞祥地名ではないか。

～丸は平地を表す原（バル）の転訛したもので北九州に多い。川向いの東院字板川原にある板碑に「北朝康永葵未二月時正初日敬白字千代房丸」の銘がある。西暦一三四三年のことだが千代丸との関係はどうであろうか。

寺　山～惟福寺の所有地との説がある。一説には寺址とも。緩やかな地形をした山の意もある。

中　村～村の中心地の意。

井　上～初瀬井路の上の意。

角ノ前～角（かく）は賀来の転訛で、賀来の手前という意味であるとの説がある。柞原神宮から千代丸を経て賀来の善神王社へのルートがありその道筋に由来するのかも。

台ノ田～丘などの平らで台のようになっている田。

鶴蒔田～鶴は津留・水流と同義で川に沿った平地を指す。

田ノ口～田の水の取り入れ口。

立　平～タテビラという。立は急傾斜地を云う。一方が台地続きで、一方は川や沢になっているところ。

小　迫～小さな迫。

葉　毛～がけ、山の斜面の崩れた所を指す。急傾斜地や丘陵山地の片岸の意。

往々にして地下水が湧出しており水を吐く意のハケ(吐)や、水がとどこおりなく流れる意のハケ（捌）を云う場合もある。

荒　平～アラヘラという。荒は荒いでごつごつとした平地のことか。

田　原～タ・ハラという地名か。タワ・ルという意味か。

塚　田～塚は古墳のある山をいう。千代丸古墳の近くの田の意か。この地区には台ノ田・鶴蒔田・田ノ口・田原・塚田のように田の付く地名が多いのが特徴であり古くからの水田地帯が地名に生きている。

②　明治九年の神社合併願

山ノ下～日吉神社のある所

スワヒラ～諏訪社のあった所

シギノミヤ～八幡社・鴫の宮社のあった所

③　明治十五年（大分縣各町村字小名取調書）

角ノ前（古城、ニュウジガタニ、上平、高井樋、アラマキ、井ノ口、井出上、下平）

中　組（岩阿弥陀堂、穴井ノ久保、金迫、荒平、クロトグウ、打越、セソ、歳ノ神、四郎房、鴫ノ宮、ツカダ、御倉、アカボヲ、中村、尻込）

宮　苑（小迫、一ッ石、立平、田ノ口平、外野地、蛇石、鷺ノ迫、

山ノ辻、堀外、古殿、寺山、観音淵、原ノ下、広瀬、城ノツル、田ノ口、小河ノ尻）

（語意・語源）

古　城～小城。小さい城砦のようなもの。

ニュウジガタニ～意味不明。

高井樋～初瀬井路の水門のあるところ。

井ノ口～初瀬井路の取水口

井手上～初瀬井路の上。天正十七年（一五八九）に初瀬井路（国井手ともいう）が完成しているので「井」の字地名は戦国時代末から江戸初期につけられた地名ということになる。

岩阿弥陀堂～岩穴の中に古墳の屋根型の石棺蓋がある。附近の人はこれを岩御堂（いわみどう）と呼んでいる。横穴古墳の内側を大きく掘り増して堂をはめ込んで仏を祀ったものである。

穴井ノ久保～「湿った小さい谷」または「穴の中のような地形」の意。

クロトグウ～意味不明。

セ　ソ～語意不明

鴫ノ宮～新奇八幡宮のあった所。

御　倉～千代丸古墳を御倉と呼んでいたのではないかと思われる。

アカボウ～語意不明

尻　込～じめじめした土地、湿地。

打　越～谷～山頂への道を登った向こう側。山を越したあたり。山を越える所、鞍部の意もある。

鷺ノ迫～アトリ科の鷺鳥に因む地名か。

広　瀬～石城川の瀬が広くなっている所。

④　明治二十二年の地籍図

アラマキ、角ノ前、上ノ平、イワミトウ、諏訪、小城ケ台、中村、天神木、金迫、北神田、千代丸、シキノミヤ、アラヒラ、トシノカミ、ハゲ、田ノ口、ショノツル、ヒロセ、ハル、テラヤマ、前田、宮ノ下、ウソノサコ、立平、田ノ口林、コザコ、セメ、

（語意・語源）

アラマキ～牧場の意

北神田～北新田で新しく開いた水田の意との説がある。

イワミトウ～岩阿弥陀堂→岩御堂の変化か

おわりに

明治十五年の政府調査による石城川の地名は字五十一、小名二三二計二八三であった。筆者の分類によれば、このうち地形にもとづく地名が二六二、その他が二十一となり、所謂自然地名は九十二・六％を占めている。これは全国的な傾向であって、諸外国

の例でみても地名は普通にはまず地形によって付けられ、それが間に合わなくなってくると追々他の材料が加味されていくのである。

旧石城川村の区域に住んでいたわれわれの祖先の大部分は、田を作り畑を耕し、山で木を切ってきた農民であって、彼らにとって土地こそが生産の場であり、生活のすべての基盤であった。土地の高低、水の有無、谷や迫の深さ、傾斜地・崩壊地の具合などは、彼ら農民の片時も忘れることのできない関心事であったに違いない。従ってこれらの土地条件を表す地形用語、地方方言が農村生活に於いて最も基本的な地名用語となったことはしごく当然の姿であるといえよう。

地名はこのように住民の日常生活に深く密着して出来たものである以上、必ず一つの意味をもっている。最初は誰かが言い始めたものにせよ、ほかの多数者が同意してくれなければ地名にはならないからである。

長い歴史の風雪に耐えて今日まで伝えられてきた、地名の一つ一つを大切にしたいものである。

参考文献

豊府略記
豊後國大分郡神社明細牒
神社合併願
角川日本地名辞典
日本歴史地名大系
地名用語語源辞典
地名語源辞典
地名の語源（鏡味完二）
地名の研究（柳田国男）
大分の地名（梅木秀徳）
地名覚書（染矢多喜男）
挾間町を歩く（小野章）
来鉢神社沿革（加藤照廣）
高崎今昔記（高崎老人クラブ）
石城川村村是
石城川郷土誌
府内及び大友氏関係遺跡総合調査研究年報